

# 平棚栽培によるカキ「太秋」の大果生産と袋かけによる外観向上

カキ「太秋」は、平棚を利用して栽培すると果実肥大が良好で、400g以上の大玉の果実になり、10a当たり4トンを超える収量が期待できます。また、9月上旬に果実袋を被覆すると汚損果などの発生が少なくなり、外観が向上します。

## ● カキ「太秋」の特性 ●

農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所で育成されたカキ「太秋」は、収穫期が11月上旬～中旬の完全甘柿で、果実肥大及び肉質が良好で、食味が優れています。

「富有」は、所内（笠間市）で栽培すると、渋みが残ることも多いのですが、「太秋」は渋みが残ることはありません。糖度は14.8～16.0%あり、「富有」、「松本早生富有」と同程度です。

ただし、「太秋」は「富有」と比較すると、うどんこ病が発生しやすいので注意が必要です。



図1 カキ「太秋」(左：無処理、右：袋かけ)

栽培方法	場所	年	樹齢	収量		果重 g	糖度 Brix%
				kg/樹	kg/10a		
棚	茨城 園研	H18	5	23.7	1778	412	14.8
		H19	6	34.9	2618	437	15.9
		H20	7	57.6	4320	399	15.0
		H21	8	54.8	4110	422	16.0
立木	新潟～ 宮崎 <sup>1)</sup>	H3～	3～7	18.6 <sup>2)</sup>		319	17.5
		H7					
立木	神奈川 静岡 <sup>3)</sup>	H18～ H20	高接ぎ	18.8		316	18.6

注1)参考:全国29研究機関の平均値  
注2)収量は苗木から育成した2研究機関(カ所)の平均値で、7年生時の平成7年のデータ  
注3)参考:2研究機関の高接ぎ樹の平均値

## ● 平棚栽培による大果生産 ●

平棚を利用してカキ「太秋」を栽培すると、早期から収量が多く、果実肥大が良好となり、平均果重が400g以上の大玉果が生産できます。

平成20～21年の10a当たり換算収量は4トン以上となり、カキの標準的な目標収量2トンを大幅に上回ります(表1)。

一般に、平棚栽培では、立木栽培より雌花数が多くなります。しかし、着果過多は樹勢の低下をまねき、樹勢が回復しないと、しだいに雄花が増加して雌花が減少するようになるので、適正着果に努めることが大切です。

## ● 袋かけによる外観向上 ●

カキ「太秋」は着色期になると汚損果、条紋果、うどんこ病などが複合して発生し、外観が低下しやすくなります(図1左)。9月上旬に果実袋(試験では赤色ナシ袋使用)を被覆すると、これらの障害は大幅に軽減されます(表2)。棚上部(太陽光がよく当たる部分)と棚下部(太陽光が当たりにくい部分)の着果位置で果実を比較すると、棚下部の方が外観は優れます(表2)。

表2 袋かけが「太秋」の外観に及ぼす影響(平成20年)

処理区	着果位置	果重 g	果色 <sup>2)</sup> c.c	糖度 Brix%	外観 <sup>3)</sup>
袋かけ <sup>1)</sup>		400	5.9	14.9	2.8
無処理	棚上部	376	6.0	15.3	1.7
無処理	棚下部	377	5.6	14.8	2.0

注1)袋かけは、9月1日～収穫期まで

注2)果色は、カキ用表面色カラーチャート値

注3)外観は、3:良好、2:普通、1:悪い